結核免疫ノ研究（第七報）

余等ノ接種菌『ＡＯ』ノ治驗例

大阪市立刀根山療養所
醫學博士　有馬頼吉
青山敬二
太繩壽郎

目次

一、緒言
二、『ＡＯ』ノ危險性
三、結核患者ニ對スル『ＡＯ』ノ毒性若クハ刺戟性
四、『ＡＯ』ノ治療的接種ニ由テ起ル諸象
接種部ノ焮衝
全身反應
局在性結核性炎症ノ消褪
病竈反應
急解熱
精神爽快
接種部ノ硬結ト化膿
持續的精神爽快、食慾亢進、體重增加
腺腫ノ縮小
ピルケー反應ノ發現ト增强
熱ノ消失
體重增加
『ＡＯ』接種ノ無效ナル又ハ薄效ナル場合
『ＡＯ』ヲ重症ニ試ミタル好例
五、臟器結核發病豫防
六、『ＡＯ』效力ノ持續
七、結核治療ノ二大要道

一　緒言

免疫元應用ノ眞乎ノ目的ハ疾病ノ豫防ニ用ヒラルベキモノデアッテ、治療ニ之ヲ應用スル場合ハ疾病ガ猶ホ未ダ極メテ限局性デアルカ、又ハ臟器ノ破壞ノ微小ナル場合ニ限ルベキデアル。殊ニ結核ノ如キ慢性ニシテ非常ニ屢々臟器ノ破壞ヲ起スニ至ル疾病ニ在テハ、其臟器破壞ヲ免疫法ヲ以テ恢復センコトノ不可能ナルハ論ヲ須ヒナイ所デアッテ、結核ノ免疫療法ヲ採ラントスル際ニ病例ヲ擇ブベキコトハ其ノ第一條件デアル。我等ハ今後ハ病例ノ選擇ニ重ヲ置カネバナラヌ。

今日マデノ所デハ、我等ガ病例ノ選擇ハ實ハ極メテ不充分デアッタ、何トナレバ我等ノ取扱フ病人ハ殆ント皆ナ重症ノ者ノミデアッテ、既ニ著シキ臟器破壞ヲ有シ、若クハ屢々種々ノ合併症ヲ有スル者ガ多カッタノデアル。從テ其成績ハ必ズシモ優秀ナルニ限ラナカッタノデアッテ、屢々述ブルガ如ク到底相對的デアリ得ルニ過ギナカッタ。

又タ或ル製劑若クハ或ル療法ノ結核病ニ對スル治效有無ヲ判定スルコトハ、外科的結核デアッテ、例之バ、腺ガ縮小シ、減少シ若クハ消失シタル場合トカ、又ハ睾丸、副睾丸等ノ結核性病變ガ縮小、吸收シテ改善ニ赴ク場合トカ、皮膚結核ガ消失スルトカ云フ如キ場合ニハ最モ明瞭ニ治癒、輕快等ヲ判定スルヲ得ルノデアルガ、內科的結核病デハ其治效ノ有無ヲ定ムルコトハ必ズシモ容易デハ無ク、否ナ寧ロ甚ダ困難デアル。例之バ、咳嗽輕減トカ、喀痰ノ減少ヤ、痰ノ中ノ結核菌ノ多寡ヤハ甚ダ屢々曖昧デアッテ、治療法ノ效力ヲ判定スルノ明確ナル標準トスルコトハ出來ナイ。又タ「レントゲン」像ノ如キモ、例之バ、甲ノ日ニ觀タル病變ガ、乙ノ日、丙ノ日ニ至リテ幾何ノ改善若クハ增惡ニ赴キタリト慥カニ言ハントスルニハ、我々ノ知ル範圍ニ於テハ猶ホ未ダ悉クハ信憑スルニ足リナイ。

我々ハ我等ノ「AB」ノ治療的效力ヲ判定スルノ標準ヲ此ノ如キ曖昧ナル點ニ取リタク無イ。乃デ、少シク生意氣ナヤウデハアルガ、大凡次ノ如キ絕對的ノ標點ニ置キタイト考ヘルノデアル。卽チ

一、外科的病竈ノ縮小ト消失。

一、熱ノ消退。

一、體重ノ著シキ增加。

一、咳嗽ト喀痰ガ持續的存在カラ持續的缺如ニ移ルコト。

一、痰中ノ結核菌ガ持續的缺如ニ移ルコト。

一、ピルケー氏反應ノ發現ト增强。

一、一般狀態ノ改善ト之ヲ間歇的ニ觀ル者ノ判斷。是デアル。

免疫的治療――或ハ總テノ治療法――ノ成績ハ前ニモ述ブルガ如ク、到底絕對的デハアリ得ナイ。詰リ相對的デアリ得ルニ過ギナイ。而シテ我々ノ標的ヲ置ク所ハ上ノ如ク絕對的ノ最高所デアリ、加之、我々ノ日常取扱フ結核患者ハ其最大部分ハ既ニ重症デアル。其上、慢性結核ノ經過ハ自然ノ儘ニ置イテモ既ニ限リナク不定ノモノデアルコト周知ノ通リデアル。夫レ故ニ我々ハ今日我等ノ治療成績ヲ――普通ニ試ミラル、如クニ――各病期ニ分ッテ分類シ、之ガ治癒、輕快等ヲ百分率ヲ以テ計上スルコトヲ適當ナル方法デアルトハ考ヘナイ。

以下記述スル所ハ此意味ニ於テ蒐集セル病例ノ中、特ニ注目ニ値スル者ノミヲ選ンダモノデアル。從テ治效ノ時ニ著シキモノガ多イノデアルガ、治療セル總テガ此ノ如クアルト云フモノデ無イコトハ勿論ノコト、實際ハ極メテ多數ノ中ノ極小部分デアル。但シ此所デ特ニ一言ヲ附加シテオキタイコトハ、以下記載スル症例ハ殆ント皆、從來ノ諸種ノ治療法ニヨッテハ容易ニ改善ニ赴カナカッタ所ノモノデアッタノガ、我々ノ治療法ニ由テ特ニ著シク改善セラレタリト認ムル者ノミデアル。此意味ハ一々ノ症例ノ記述ヲ詳シク讀ムナラバ必ズ略ボ明カニナルノデアロウ。

尙ホ本編ニハ態ト結論ナルモノヲ附ケナイ。ソレハ別ニ理由ガアッテデハナクテ、多數ノ症例ノ羅列ニ過ギナイ本編ハ之ヲ綜括スルニ由ナキガ爲メデアル。

二　『AO』ノ危險性

之ハ第一ノ先決問題デアル。卽チ『AO』ガ人體ニ對シテ危險デアルヤ否ヤ、又タ如何ナル副作用アルヤハ治療若クハ豫防ノ目的ニ之ヲ應用スル際ニ先ヅ決定シテ置カナケレバナラヌ。『AO』ガ結核菌ニ對シテ最モ敏感ナル「モルモット」ニ

對シテスラ極メテ弱毒性デアッテ、莫大ノ量ヲ以テ之ニ臨ムトモ全身感染ヲ起サザル傾向ヲ有スルコトハ本報告ノ第四報ニモ詳述シタ所デアル　其後我々ノ研究室ニ縁故アル醫師ニシテ自ラ結核ニ罹患シテ痰中ニ結核菌ヲ出ス者、竝ニピルケー氏反應陽性デアッテ、肺結核ノ疑アル醫師合セテ四人ハ先ヅ自ラ進ンデ相前後シテ接種試驗ニ自身ヲ提供シ、ソレガ全然無危險デ且ツ殆ント無害デアルコトノ確證ヲ得、加之、頗ル有效デアルラシイコトノ證認ヲ得タノデ、乃テ患者ヘノ應用ニ取リカヽリ、主トシテ初メハ有馬自身ニ診療ヲ託シタル人々ニ諒解ヲ求メテ之ヲ試用シ、昨大正十一年十二月末迄ニ計四百八十七人ニ之ヲ施シ、其接種回數ハ千二百五十八回ニ上リ、其後今日迄ニ又タ既ニ略ボ同數若クハソレ以上ノ人數ニ此接種ヲ施シタルガ、未ダ曾テ之ガ爲メニ全身感染ヲ起シタリト見ルガ如キ危險無キハ勿論ノコト、腺腫ヲモ之ガ爲メニ發シタルコトハ唯ノ一回ダモ無カッタノデアル。卽チ我々ノ接種苗『AO』ノ危險性ハ皆無デアル。

此點ハ實ニ有馬ガ既ニ屢〻種々ノ機會ニ於テ

「結核患者ハ結核免疫ヲ有スルガ故ニ之ニ生菌ヲ接種スルコトハ理論上無危險デアル」

ト聲明シタル所ニ全然一致シテ居ル。殊ニ太繩ノ記述シタル所ニヨッテ、結核菌ハ「サポニン」培養ノミニヨッテモ既ニ著シク其毒性ガ減弱セラレ、莫大ノ量ヲ以テ「モルモット」ニ臨ミテモ、ソレニ全身感染ヲ起サザル傾向ヲ有スルノデアリ、人體ノ治療ニ用フルガ如キ量デハ「モルモット」ノ局所病變ヲスラ起サナイノデアルカラシテ、元來既ニ結核菌ノ侵入スルニ遭フテ、ピルケー反應ヲ呈スル者、又ハ他ニ既ニ明カニ結核性病徵ヲ有シテ、卽チ同時ニ結核免疫ヲ有スル患者ニ之ヲ應用スル事ノ無危險デアルハ初ヨリシテ瞭々タル所デアル。加之、今後適當ナル時機ガ來テ、豫防接種トシテ健常ノ幼乳兒ニ之ヲ用フル場合ガアルトスルモ、之レノ適量ヲ接種スルニ何等ノ遲疑ト躊躇トヲ要シナイモノデアルト考ヘラレル。

三　結核患者ニ對スル『AO』ノ毒性若クハ刺戟性

我等ノ『AO』ハ彼ノ「ツベルクリン」類ノ有スルガ如キ猛毒性、刺戟性ヲ結核患者ニ現ハサナイ。

此點ハ「ツベルクリーン」類――有馬ノ言葉ヲ以テスレバ『「ツベルクリン」化シタル結核菌及ビ其生活產物』――ト蠟質

ヲ除キタル『生(ナマ)ノ菌原形質』デアル所ノ我等ノ『AO』トノ實ニ根本的ノ相異點デアル。

元來生結核菌ハ、獨リ我々ノ製劑ニ限ラズ、結核性個體ニ對シテ「ツベルクリン」化シタル菌毒ノ如クニ猛毒性デハ無イ。「ツベルクリン」ハ例之バ、舊「ツベルクリン」デアッテ、其毒成分ハ一・〇瓱中ニ僅ニ二・三瓱ヲ含ムニ過ギナイモノデアッテモ、既ニ其ノ〇・二若クハ〇・三瓱許リニシテ結核「モルモット」ヲ斃シ、結核患者ニ對シテハ僅ニ其ノ〇・〇〇一瓱許リニシテ既ニ多クハ著シキ全身反應ヲ現ハスノデアッテ、其實際ニ秤量シ得ベキ毒成分ハ「モルモット」ノ致死量ニ在テハ僅ニ〇・〇四五瓱デアリ、結核患者ノ反應量ニ至ッテハ實ニ〇・〇〇二三瓱デアルニ過ギナイノデアル。然ルニ生結核菌若クハ我等ノ製劑ハ之ニ百倍スルノ大量ヲ用フルモ殆ンド何等ノ局所性竝ニ全身的反應ヲ呈スルコトハ無イ。又タ、從來普通ニ結核ノ中毒症狀トシテ知ラレタル患者ノ發熱症狀ノ如キモ恐クハ患者體內ニ存スル結核菌ノ毒成分ニ因ッテ起ルモノデハ無クテ、主トシテ病竈ノ炎症性產物ノ吸收ニ因ッテ起ルモノデアルニ相違ナイ。即チ患者體內ニ存スル結核菌モ亦患者ニ對シテ直接ニ中毒症狀ヲ起スコトハ無キモノデアル。我等ハ其證據ヲ人工氣胸療法ノ成績ニ於テ見ルノデアル。

片肺ニ空洞症狀ヲ有シテ、喀痰咳嗽ハ素ヨリ、著シキ熱發盜汗等アル、即チ所謂中毒症狀著シキ患者ニ適應症ヲ選ミテ人工氣胸法ヲ施ストキハ、既ニ十數時間ニシテ、喀痰ノ分泌ハ減少若クハ消失スルコトアリ、所謂中毒症狀タル發熱、盜汗等ハ一頓ニ消散スルノデアル。併シナガラ此短時間內ニ於テ人體內ニ在ル結核菌ノ生活機轉ガ、而カク一頓ニ停止スルコト無キハ想像ニ依テモ明カナル所デアッテ、菌ハ依然トシテ存在スルノデハアルガ、送入セラレタル瓦斯體ノ壓迫ニ依ッテ病竈ガ固定セラレ、炎症性刺戟ガ一頓ニ消失シタルガ爲メニ、炎性產物ガ吸收セラルルコト無キガ故ニ、所謂中毒症狀ガ頓挫スルノデアラ子バナラヌ。

即チ知ル、生結核菌ノ人體內ニ在ルモノハ極メテ大量ニ生存シテモ、多クハ夫レニ因テ中毒症狀ヲ起スコトハ無キモノデアリ、培養セル生菌ヲ治療ニ必要ナル量輸入スルトモ、ソレガ「ツベルクリン」化シテ居ナイ場合ニハ、著シキ毒性ヲ呈スルコトハ無キモノデアルコトヲ。

コトガアル。例之ハ、「フリクテーン」ガアツテ、炎性刺戟ガ可ナリ强キモノニ、多少ノ局所反應ヲ起スニ足ルノ量ヲ接種シ、翌日既ニ炎症ノ頓挫シタルヲ既ニ數回經驗シタ。併シ又タ「フリクテーン」デハ無效デアツタ者モアル。但シ「フリクテーン」ハ其因ハ必ズシモ結核菌トノミ限ラナイモノヽ由デアリ、原因的檢査ニ疎デアツタカラ、有效デ急ニ消炎シタ場合ハ結核性デアツタロウト逆ニ推定シタノデアツタガ、無效デアツタ場合ガ、結核性デ無カツタコトノ確證ハ素ヨリ無イ。兎ニ角、斯ル局在性炎症ガ、『AO』接種後急ニ消退シタコトハ特殊ノ誘導作用ニ因ルモノデアルト思ハレル。又タ、腺病性結膜炎ヲ患ヘタ子供ニ著シキ速效ヲ現ハシタ次ノ如キ例モアツタ。但シ此種ノ結膜炎ニ『AO』ヲ用ヒタコトハ唯ダ此二例ノミデアルカラ、今後他ノ人々ニヨツテ眞乎ノ價値ガ定メラルヽコトデアロウ。

[redacted] 八年、男、外來、初診大正十一年三月二一日。診斷 頸腺、右腋窩腺、右側肺門腺結核、貧血。一年以來體重增加セズ、夜間乾咳。學業屢〻缺課ス。同年一一月末マデ亞砒酸鐵劑等ヲ與フ、病勢弛張アリ、一時輕快醫療中止。十二年三月再ビ羸瘦ヲ始メ、頸腺腋下腺增大シ、腺病性結膜炎ヲ發シ、眼科的治療效無シ。同年五月一一日診斷右腋下腺腫、右肺門腺結核、腺病性結膜炎兼角膜炎。ピ|反應中陽性。五月一一日『AO』〇・〇五瓩接種。特ニ良效ナシ。接種部ニハ〇・五糎許ノ小硬結ヲ生ズ。六月八日第二回接種〇・一瓩。翌二日間輕キ局所反應アリ、十一日朝結膜、角膜ノ發赤、分泌等突如トシテ去リ、快迪ノ狀譬ヘ難シト云フ。又タ眼科ノ老醫之ヲ奇トスト云フ。通學常兒ノ如シ。小硬結ヲ貽ス。七月十日マデ結膜角膜ノ炎症再燃ノ狀ナシ。

[redacted] 七歲 男。外來 初診 大正一二年五月一五日。診斷 頸腺、肺門腺結核、腺病性結膜炎。貧血。夜間乾咳年餘ニ亙リ、衰弱ヲ增シ、四月首痲疹ニ罹ル。結膜炎ハ既ニ約三年來屢〻身體ノ違和ニ乘ジテ發シ頑强ニ醫治ニ抗シテ、學業爲メニ阻マレ、日夜過敏狀態ヲ持シ、食慾モ亦大ニ害セラル。五月一五日ピ|反應陰性。五月二二日『AO』〇・〇七五瓩接種。翌日極メテ著明ノ「オイフォリー」、結膜炎症突如トシテ去リ、其日ヨリ再ビ眼科醫ヲ訪ハズト云フ、學業常兒ノ如シ。後接種部ニ極メテ小ナル硬結ヲ貽ス。六月一五日結膜炎ノ苦痛全ク無シ〇・一五瓩接種、全身竝ニ局所反應極メテ輕シ。七月二日塵埃ノ入ルニ遭ヒ、太ダシク刺戟セルノ後右眼結膜再ビ强キ炎症ヲ發シ、羞明甚ダシ、翌日左

テ種々ノ疑問ヲ有スルモノデアッテ、今後ノ研究ヲ要スル一分野デアルト考ヘル)。

此一過性反應ハ上記ノ如クピー反應ノ强弱ニ凡ソ一致シテ其個體結核免疫ノ有無强弱ト密接ノ關係ニ在ルモノデハアルガ、是ハ併シ、單ニ結核免疫トノミノ關係デアルト許リ觀ルベキモノデハナクシテ、一般外界ヨリスル影響ニ對スル抵抗力ノ有無强弱ニモ由ルモノデモアッテ、其間ニ特殊性ハアルトシテモ、之ハ寧ロ一般「プロテイーン」體ノ刺戟ニ對シテ共通ニ現ハレ來ル所ノモノデアルトモ考ヘラル丶。

但シ又、『AO』接種ニ由テ起ル所ノ一過性竝ニ全身的諸現象ヲ綜合シテ仔細ニ考ヘテ觀レバ、「ツベルクリーン」ヤ若クハ其他ノ一般ノ「プロテイーン」體ノ使用ニ由テ現ハル丶モノトハ原則的ニ異ナッタ所ガアル。

結核性個體ニ向ッテ「ツベルクリーン」類ヲ用フルニ方ッテハ其初メハ甚ダ猛毒性デアルガ、使用ノ囘ヲ重ヌルニ從テ、漸次ニ其毒性ガ減ジ、後ニ至レバ初メニ比シテ驚クベキ大量(一小兒ニ舊「ツベルクリーン」二五・〇瓱(Schlossmann)ヲモ用フルニ堪ユルニ至リ、即チ所謂「ツベルクリーン」耐性ヲ發現シ、「ツベルクリーン」ヲ使用シタルガ爲メニ、ソレニ對スル過敏性竝ニピー反應ノ增强スルコトハ無イ。又タ種々ノ細菌性疾患ニ對シテ、各其特殊ノ「ワクチーン」類—其多クハ皆ナ菌蛋白ニ何等カノ理化學的處置ヲ施シテ其自然性ヲ殺ヒタルモノ—ヲ應用スルニ方ッテモ、暫クニシテ矢張リ同樣ノ耐性ヲ現ハシ、又タ一般ノ異種蛋白ヲ非口經的ニ與フル場合ニモ亦等シク個體ハ其蛋白體ニ耐性トナルモノデアル。換言スレバ、特殊ノ細菌性蛋白體デモ、特殊ナラザル蛋白體デモ其各々ノ原形質ノ自然性 Protoplasma-Naivität ヲ殺ハレタルモノハ何レモ皆ナ非口經的應用ニ依テ耐性ヲ現ハシ、殊ニ其皮膚反應竝ニ接種部ノ刺戟及ビ全身的反應ハ囘ヲ重ヌル每ニ減弱スル(「アナフィラキシー」現象ハ之トハ聊カ別ノ關係デアルカラ姑ラク措ク)。

然ルニ我々ノ生菌製劑デアル『AO』應用ノ經驗デハ是等トハ反對ノ現象ヲ看取スルコトガ出來ル。即チ前ニモ記述シタヤウニ、初メピー反應陰性若クハ微弱デアル所ノ個體(此個體ハ之ニ「ツベルクリーン」ヲ皮下ニ接種スルトモ、ソレニ對スル反應ハ、恐ラク必ズ陰性若クハ微弱デアロウ)ニ『AO』ヲ接種スレバ其後漸次ニピー反應ガ陽性トナリ、又ハ增强シ、若クハ初メ稍〻大量ノ接種ニ反應鈍カリケル者ガ、後ニハ前ヨリモ少量ノ接種ニヨッテヨリ强キ反應ヲ呈スルニ至

ルノデアル。

元來傳染性疾患ニ當ツテ、特殊過敏性ノ發生スルノ理論ト其價値トハ今日ニ於テハ未ダ全ク不明デアルガ、其事實ハ天然痘ニ在テモ、結核若クハ其他ニ在テモ、極メテ著シキ事象デアツテ、ソレハ概ネ皆ナ生キタル病原體ノ侵入ニ由ツテノミ起リ來ル所ノモノデアル。約メテ言ヘバ、此特殊過敏性ノ發生ハ生病原體ノ感染若クハ接種ト極メテ密接ナル關係ニ在ル一ノ生物學的反應デアツテ、之ヲ人工的ニ人體ニ發生スルヲ證明シ得タルモノハ種痘ト我々ノ『ＡＯ』接種トノ雙ツアルノミデアル（結核デハ佐多氏生菌粉ニ此作用アリ、フリードマン製劑、志賀氏「ワクシン」、ゼルター氏生「ツベルクリーン」ニモ或ハ此作用アラント想像スル）。

兎ニ角、此過敏性殊ニ皮膚粘膜ノ過敏性反應ハ特殊免疫性ノ存否、强弱ト竝行スル一種ノ生物學的反應デアツテ、其存否、强弱ハ多クハ直チニ其個體ニ於ケル特殊免疫ノ存否强弱ヲ示スモノト解釋セラルベキデアリ、其起原ハ天然痘及ビ種痘免疫ニヨツテ學ビ得タ所ノモノデアリ、結核菌ニ感染セル個體、卽チ結核免疫ヲ有スル個體ニモ必存ノ事象デアル。而シテ之レガ我々ノ生菌製劑接種ニ由ツテモ亦發生若クハ增强セシメ得ルモノデアル。我々ハ此點ニ特ニ非常ニ深イ興味ヲ覺ユルモノデアル。

四　『ＡＯ』ノ治療的接種ニ由テ起ル諸象

玆ニ我々ハ『ＡＯ』接種ニ由テ起ル諸種ノ現象ヲ列記シテ見ヤウ。

第一表

一、接種部ノ焮衝（誘）
一、全身反應（誘）
一、病竈反應（誘）
一、急消炎（誘）
} 一過性現象

一、急解熱（誘）
一、精神爽快（誘）
一、接種部ノ硬結、化膿（誘）
一、食慾亢進、體重增加、持續的精神爽快（免、誘）
一、腺腫縮小、消失、硬結結節ノ吸收、肺病竈縮小、水泡音ノ減、消、X線像ノ變化（免、誘）
一、熱ノ消失（免）
一、ピルケー反應ノ發現ト增强（免）
一、皮膚惡疫質ノ消失（免）　以上漸發現象

註、右表中、（誘）ハ誘導作用（刺戟作用）ヲ爲シ若クハソレニ由テ起ル結果タルヲ意味シ、（免）ハ免疫作用ニ因テ起ル結果タルヲ意味ス。

又タ此等諸現象ノ外ニ種々ノ免疫反應竝ニ血清中ニ於ケル一種ノ沈澱反應等ヲ追加スル時ガ來ルト思フ。

接種部ニ焮衝

右ノ表ノ中、接種量ト其個人ノ過敏性ノ程度ニ應ジテ

ヲ起シ、又ハ稀ニハ輕キ

全身反應

ヲモ現ハスコトアルハ既ニ述ベタ。此接種部ノ焮衝ハ病竈ノ病機改善ニ向ツテハ恐ラク特殊ノ誘導作用ヲ爲スモノデアロウ。尙ホ局所又ハ全身反應ニ就テハ後ニ記スル各個ノ症例ニ於テ御覽ヲ願フ　又タ、

局在性ノ結核性炎症ガ急ニ消褪スル

コトガアル。例之ハ、「フリクテーン」ガアッテ、炎性刺戟ガ可ナリ强キモノニ、多少ノ局所反應ヲ起スニ足ルノ量ヲ接種シ、翌日既ニ炎症ノ頓挫シタルヲ既ニ數回經驗シタ。併シ又タ「フリクテーン」デハ無效デアッタ者モアル。但シ「フリクテーン」ハ其因ハ必ズシモ結核菌トノミ限ラナイモノ、由デアリ、原因的檢査ニ疎デアッタカラ、有效デ急ニ消炎シタ場合ハ結核性デアッタロウト逆ニ推定シタノデアッタガ、無效デアッタ場合ガ、結核性デ無カッタコトノ確證ハ素ヨリ無イ。兎ニ角、斯ル局在性炎症ガ、『AO』接種後急ニ消退シタコトハ特殊ノ誘導作用ニ因ルモノデアルト思ハレル。又タ、腺病性結膜炎ヲ患ヘタ子供ニ著シキ速效ヲ現ハシタ次ノ如キ例モアッタ。但シ此種ノ結膜炎ニ『AO』ヲ用ヒタコトハ唯ダ此二例ノミデアルカラ、今後他ノ人々ニヨッテ眞乎ノ價値ガ定メラルヽコトデアロウ。

[redacted] 八年、男、外來、初診大正十一年三月二一日。診斷 頸腺、右腋窩腺、右側肺門腺結核、貧血。一年以來體重增加セズ、夜間乾咳。學業屢々缺課ス。同年一一月末マデ亞砒酸鐵劑等ヲ與フ、病勢弛張アリ、一時輕快醫療中止。十二年三月再ビ羸瘦ヲ始メ、頸腺腋下腺增大シ、腺病性結膜炎ヲ發シ、眼科的治療效無シ。同年五月一一日診斷右腋下腺腫、右肺門腺結核、腺病性結膜炎兼角膜炎。ピ|反應中陽性。五月一一日『AO』〇・〇五瓩接種。特ニ良效ナシ。接種部ニハ〇・五糎許ノ小硬結ヲ生ズ。六月八日第二回接種〇・一瓩。翌二日間輕キ局所反應アリ、十一日朝結膜、角膜ノ發赤、分泌等突如トシテ去リ、快適ノ狀譬ヘ難シト云フ。又タ眼科ノ老醫之ヲ奇トスト云フ。通學常兒ノ如シ。小硬結ヲ貽ス。七月十日マデ結膜角膜ノ炎症再燃ノ狀ナシ。

[redacted] 七歳 男。外來 初診 大正一二年五月一五日。診斷 頸腺、肺門腺結核、腺病性結膜炎。貧血。夜間乾咳年餘ニ亙リ、衰弱ヲ增シ、四月首麻疹ニ罹ル。結膜炎ハ既ニ約三年來屢々身體ノ違和ニ乘ジテ發シ頑强ニ醫治ニ抗シテ、學業爲メニ阻マレ、日夜過敏狀態ヲ持シ、食慾モ亦大ニ害セラル。五月一五日ピ|反應陰性。五月二二日『AO』〇・〇七五瓩接種。翌日極メテ著明ノ「オイフォリー」、結膜炎症突如トシテ去リ、其日ヨリ再ビ眼科醫ヲ訪ハズト云フ、學業常兒ノ如シ。後接種部ニ極メテ小ナル硬結ヲ貽ス。六月一五日結膜炎ノ苦痛全ク無シ〇・一五瓩接種、全身竝ニ局所反應極メテ輕シ。七月二日塵埃ノ入ルニ遭ヒ、太ダシク刺戟セルノ後右眼結膜再ビ强キ炎症ヲ發シ、羞明甚ダシ、翌日左

眼亦結膜炎ヲ誘發セル如シ。七月四日『ＡＯ』〇・一瓩ヲ接種ス。五日及ビ六日、多少不快ヲ增シタル如ク、接種部三糎許發赤壓痛ヲ訴フ。七日朝結膜炎症一頓ニ去リ、登校常ノ如シ。

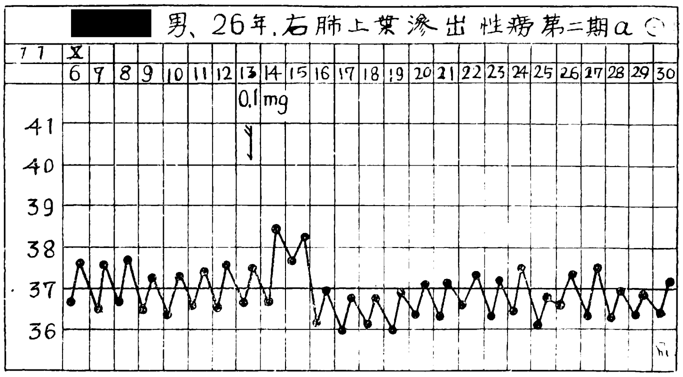
本例ヲ記述シテ特ニ注意ヲ喚起スルハ此男兒五月二十二日第一回接種ヲ受ケテ翌日既ニ著明ナル爽快ヲ覺ユルト同時ニ結膜炎症狀頓ニ快癒ノ狀ヲ呈シタルハ可ナリトシ、次デ二四日ヲ經テ更ニ第二回ノ接種ヲ施サレタル者ガ、夫レヨリ纔カニ半月ヲ經タルニ過ギザル七月二日ニ至リ塵埃ノ飛入シテ摩擦刺戟シタルコトアルニ由リテ著シキ炎症ヲ起シタルコト是デアル。卽チ是ニ由テ觀レバ『ＡＯ』接種ニ依ル免疫若クハ誘導作用ハ薄弱ナルモノニシテ容易ニ僅カナル刺戟ニヨツテ其存在ヲ疑ハルベキモノナルカノ感ガアルノデアル。私ハ之ニ就テハ此無智ナ家庭ニ於ケル幼少者ノ執ツタ機械的ナ刺戟ニ重キヲ置クモノデアルガ、ソレトシテモ元來第一例ト云ヒ、此例ト云ヒ『ＡＯ』接種ニ依ル效顯ノ餘リニ速カニシテ大ナルガ如ク見ユルノヲ既ニ出來過ギタ程ニ思フモノデアルカラ、免疫力持續ノ長サニ就テノ判定ガ此ノ例ニヨツテ與ヘラルヽコトニデモナレバ少々苦痛デハアルガ、兎ニ角强テ此場合ニ牽强附會ニ類スル膠著ハナサナイ積リデアル。

病竈反應

唯ダ往々ニシテ一過性全身反應ヲ起スコトアルハ繰リ返シ述ベタ通リデアル。此全身反應ヲ起ス場合ニ又稀レニ肺ニ於テ一過性ノ竈反應ト見ルベキモノヲ起スコトガアル。之ハ矢張リ菌蛋白體輸入ニ因ル刺戟作用デアツテ、「ツベルクリーン」ニ於テ曾テ屢々經驗シタル所ノモノト同一ノモノデアル。但シ我々ノ『ＡＯ』ヲ以テシテ、「ツベルクリーン」ニ由テ起ルガ如キ劇シキ竈反應ヲ起シタコトハ今日マデニテハ皆無デアリ、從テ之ガ爲メニ喀血ヲ起シタトカ、引續キ增惡ニ傾イタトカ云フ例ハ一回モ無イ。詰リ『ＡＯ』ニ由ル竈反應ハ程度ニ於テモ、持續ニ於テモ極メテ輕ク、毫モ危險ハ伴ハズ、之ヲ現ハス場合ガ、極稀デアルカラ、特ニ注意ヲ値スルモノデハ無イ。

急解熱

第一圖



蛋白性刺戟劑ヲ用ヒテ體溫ノ變動ヲ起シ、之ニ次デ一時體溫殊ニ熱ノ下降スルコトアルハ、結核患者ニ於テハ「ツベルクリーン」療法ニ際シテ可ナリ屢々經驗サル、所デアッタ。即チ輕キ熱ヲ有スル患者ニ態ト全身反應ヲ起スベキ「ツベルクリーン」量ヲ注射シテ、一日若クハ二日ニ亙ル體溫上昇ヲ促ガシタル後ハ元トアリタル輕熱ヲ或ル時日間抑制スルコトアリ、之ヲ反復スルトキハ往々其ノ解熱ヲ贏チ得ルコトアルハ、治療家ノ往々遭遇シタル所デアッタ。

我等ノ接種苗ヲ用ヒタル場合ニモ稀ナラズ這種ノ急解熱ガ現ハレタ。而シテ之レハ即チ「ツベルクリーン」其他ノ蛋白刺戟療法ニ於テ見ルモノト等シク其誘導作用ニ由テ來ル所デアル。上ノ第一圖ハ其一例ヲ示シタモノデアル。

接種部ニ焮衝ヲ起シ、又ハ多少ノ全身反應ヲ起ス場合ハ多クハ亦多少ノ頭痛倦怠等ヲ連起シテ不快ニ一二日ヲ過スノデアルガ、之ト反對ニ、局所反應モ、全身反應ヲモ起サザル多クハ極メテ少量ヲ以テ接種ヲ行ッタ場合ニ接種ノ翌日又ハ二三日ニ亙ッテ屢々

精神爽快

ヲ覺ユルコトガアル。之ハ極メテ少量ノ「ツベルクリーン」ヲ用ヒタ際ニモ極メテ稀ニハ見ル所デアッテ、亦タ誘導作用ニ由テ起ル所ノ一種ノ現象デアル。

上記ノ凡ソ五種ノ現象ハ孰レモ一過性デアッテ、多クハ一二日間ノ出來事デアリ、熱ノ下降モ長クモ、三四日ヲ出デナイ所ノモノデアル、而シテ惟フニ是等ハ皆ナ一般ノ蛋白刺戟作用ニ類スル特殊ノ誘導作用ニ基因スルモノデアラウ。

又是等ノ一過性現象ノ去リタル後ニ於テ

接種部ニ硬結

ヲ貽シテ長ク數週、若クハ數月又ハソレ以上ニ亙ルコトガアル。若クハ一過性ノ焮衝ガ去ツタ後、早キハ二三週、遲キハ數月、半歲以上ヲ經テ硬結ガ

軟化シ化膿

スルコトガアル。此化膿シタルモノハ程經テ復タ吸收セラルルモノモアリ、多クハ漿液樣、又ハ乾酪樣、纖維素樣ノモノヲ混ズル漿液樣ノ內容ヲ排出シ、所置ノ惡キ時ハ往々容易ニハ治癒セザル潰瘍ヲ遺スコトガアル。此膿瘍ノ內容ニハ通常結核菌ヲ證明シナイ。潰瘍ノ性質ハ屢々遲鈍性デアツテ、他ノ結核性ノ潰瘍ト類似シテ居ル（膿瘍若クハ潰瘍ノ處置ハ後ニ述ベル）。

此接種部ノ硬結乃至膿瘍ハピルケー反應ノ存否强弱ト密接ノ關係アルモノデアツテ、全身ノ抵抗力（免疫）ノ有無强弱ト關連シテ居ルノデアル。殊ニ初メピルケー反應ノ鈍カリケル者ガ、此接種ニ因テ之ヲ强ク現ハスニ至ルコトヲ後ニ述ブルノデアルガ、此場合、接種ノ直後ニハ殆ンド何等ノ反應ヲ呈セズシテ、程經テ硬結ガ增大シ又ハ化膿スルコトガアリ、之ハ全クハ其間ニ免疫ト過敏性ガ增强シテ然ル後ニ此局所性刺戟ノ現象ヲ現ハシ來ルモノニ外ナラヌ。之ハ殊ニ興味アル一現象ト謂ツテ可イ。

此ノ硬結若クハ膿瘍ヲ形成スレバ卽チ其部ニ於テ稍々長ク持續スル特殊ノ刺戟ガ存スル譯デアツテ此刺戟ハソレノ存スル間、誘導作用ヲ全身的ニ與ヘル譯デアツテ、經驗上患者ニ有利ナル一現象デアル。斯ル硬結等ガ患者ニ有利ナル作用ヲナスモノラシキコトハフリードマンモ之ヲ言ヒ、ゼルターモ亦之ヲ言明シタ。

此接種部ノ變化ト相前後シテ、若クハ屢々之レ無クトモ、

持續的ニ精神爽快

ヲ覺エ、

食慾亢進

シ、從ツテ、

體重增加

ヲ著シク來ス場合ガ多イ。

此等ノ作用ハ一部ハ硬結乃至ハ膿瘍ノ生ズルニ因ル刺戟誘導作用ニ由ルモノデモアリ、大部ハ漸ク免疫ノ增強スルニ由テ來ルモノデアルト思フ。體重增加ノコトハ殊ニ著シイ現象デアルカラ後ニ更メテ病例ヲ擧ゲテ說明スルコトニスル。

腺腫ノ縮小消失

スルコトガ亦タ可ナリ著明ニ現ハレル。結核性ノ淋巴腺腫ハ乾酪變性ヲナシ、又ハ軟化シ膿瘍トナルニ至ラザルモノハ結節形成ヲ現ハサザル一種特異ノ病變デアッテ、特殊療法ニヨラズトモ往々痕跡無キマデニ消失スルコトガアルモノデアル。斯ノ如キ未ダ乾變、軟化スルニ至ラザル頸部、腋窩等ニ存スル結核性腺腫ハ、我等ノ接種苗ノ應用ニヨッテ太ダ屢々比較的短時間內ニ縮小シ又ハ消失スル。左ニ其病例ノ二三ヲ擧ゲル。

相　爲　八年、男、外來　初診大正一二年五月十八日、昨年一一月以來夜間乾咳ヲ始メ、本年一月以來殊ニ甚ダシク、屢々嘔吐性痙攣性咳嗽ヲナス、時ニ粘液痰アリ、其際吸氣性笛聲アリ、幼兒期ヨリ頸腺腫アリ、絕エズ貧血、卽チ右側頸部ニ小豆大ヨリ指示頭大ニ至ルモノ四個、左側ニハ項部ヨリ、鎖骨上窩ニ亙リテ六個ノ腺アリ、小豆大以下ノモノハ兩側ニ數個アリ。右肺ハ左肺ニ比シテ一般ニ呼吸音著シク弱ク、斷續性ナリ、「レントゲン」像ニ見ルニ右側肺門部ニ三

粍許ノ徑ヲ有スル陰影アリ。弛張性熱三七・五度以内。診斷、右側肺門淋巴腺結核、頸腺結核。體重一二・一瓩。五月二十九日第一回接種〇・〇五瓩、反應ナシ。六月一日以後體溫三六・八度ヲ超エズ、神氣爽快、食機大ニ進ミ、六月八日體重既ニ一四・〇ニ達シ、右肺ノ呼吸音疾クモ著シク强盛トナリ、血色良ク、夜安眠、盗汗亡シ。六月二二日第二回接種〇・一瓩、體重一七・五瓩、反應ナシ。七月一日起居全ク健常、些モ病狀ナシ。頸部ノ腺腫ハ漸次ニ縮小シテ精々小豆大ノモノ數個ヲ遺スノミ。「レントゲン」像ニヨル肺門腺ノ大サ不明、計測スベカラズ。七月十七日體重一九・〇瓩。

島　シ　一七年、女　外來　大正十一年五月以來腎臓水腫ニ罹リ、八月以來日晡輕熱三七・八度ニ達シテ去ラズ、肩凝、頭痛、屢〻被働性長息、盗汗等アリ。初診十二年三月二日肺部打診上ニ故障ナシ、但シ右肺ハ左肺ノ呼吸音著シク粗烈ナルニ比シ、殆ンド聽取スル能ハザル程低弱、右側腎臓腫大、季肋下ニテ横徑約七・〇粍、多少ノ壓痛アリ。尿中蛋白中量。體溫三七・九度、體重三七・八瓩。診斷、右側肺門腺結核、腎臓水腫。三月六日「レ」線診査、右肺門腺腫徑四・〇粍ナルヲ證明ス。「ピ」反應中陽。三月十三日『AO』〇・〇三瓩。局所竝ニ全身反應ナシ。翌々十五日以後ハ體溫三七・〇度ヲ超エズ盗汗歇ミ、八ケ月以來嘗テ知ラザル爽快ヲ貪ルヲ得タリト。三月三十日被働性長息全ク歇ミ、頭痛其他ノ自覺症殆ンド去ル。右肺呼吸音著シク明カトナリ、左肺ノ呼吸音ハ反對ニ著シク沈靜スルヲ見タリ。四月二十四日第二回接種〇・〇六瓩。體重三八・〇瓩、翌日體溫三七・五度ニ昇リ、直ニ下降。五月一日「レントゲン」診査、右肺門腺影甚ダ薄ク、大サ亦半減セルヲ見ル。五月二十五日第三回接種〇・一瓩。體重三九・五瓩翌二日ニ亙リテ體溫高キハ三七・八度ニ至リ、頭痛アリ、第三日ニ至リテ下降、神氣甚ダ佳快。五月十六日尿中蛋白稍〻減ジ、右腎腫觸診上著シク小サク、季肋下ニテ横徑約六・〇粍ニ至ル。

ピルケー反應ノ發現ト增强

此事ハ前ニモ記スルガ如ク、我々ノ『AO』ニ於テ特異ナ點デアリ、我々ノ殊ニ深イ興味ヲ覺ユル點デアル。次ニ揭グル第二表ハ卽チ『AO』接種ノ前後ニ於ケルピ反應ノ移動ヲ示シタルモノデアル。

第二表

No.	姓名略	性	年齢	病状	初ノピ反應 年月日	初ノピ反應 强サ	AO接種 年月日	AO接種 量、瓩	AO接種 反應	後ノピ反應 年月日	後ノピ反應 初トノ間隔	後ノピ反應 强サ	備考
1	[redacted]	女	13	肺結、二期ノ初メ、輕熱	一〇、八、一二	−							一、一〇年九月ヨリ一一月ニ至ル間ニ「ツベルクリン」十五回注射ス、ピ反應ヲ增强セズ。 二、小硬結ハ化膿シ、一一年四月哆開セリ。
					一〇、九、二七	−	一〇、一一、二二	〇・〇五	小硬結	一〇、一二、二〇	二八日	++	
					一〇、一一、二二	−				一一、四、一四	一七四日	+++	
2	[redacted]	男	15	肺結、二期ノ中、輕熱	一〇、八、二三	−							一、一〇年八月ヨリ、十月ニ至ル間「ツベルクリン」十二回注射ス、ピ反應ヲ增强セズ。 二、體重、 一〇年一〇月九日三〇・〇「瓩」 一一年五月九日三一・〇「瓩」 一一年七月一八日三四・五「瓩」 一一年一一月七日三八・〇「瓩」 一一年一二月二九日四〇・〇「瓩」
					一〇、九、六	−							
							一〇、一〇、一一	〇・〇五	ナシ	一〇、一〇、二五	一四	−	
										一〇、一一、一	二一	+	
										一〇、一一、八	二八	++	
										一一、五、五		+	
							一一、五、九	〇・一	ナシ	一一、六、二		+++	
										一一、九、一〇		+++	
3	[redacted]	男	18	肺結二期、陳舊、肋膜炎、輕熱	一〇、一〇、一四	+++							
					一一、二、二四	+							
					一一、三、七	±	一一、三、八	〇・一	小硬結	一一、四、七	三一	++	
4	[redacted]	男	15	肺、二期ノ初頸腺腫强貧血	一〇、五、二〇	−				一〇、五、二七	三	−	
							一〇、五、二四	〇・一	小硬結	一〇、七、八	四五	+++	
							一〇、一二、二七	〃	〃	一一、二、二八		+++	

5	[redacted]	男	33	肺、二期ノ中	一一、二、三	+						
					一一、二、一三	+	一一、二、一三	〇・一	ナシ	一一・四、七	五三	卅
6	[redacted]	女	12	頸、氣管腺腫	一一、二、三	+						
					一一、四、八	+	一一、四、一一	〇・〇五	ナシ	一一、五、五	二五	卅
7	[redacted]	男	17	肺、二期、輕熱	一一、八、二五	+	一一、九、五	〇・〇五	ナシ			
							一一、九、一九	〇・一	小結	一一、一〇、一三	三八	卅
8	[redacted]	男	16	肺二期ノ初、輕熱	一一、九、二六	−	一一、九、三〇	〇・一	ナシ	一一、一〇、一三	一三	+
					〃〃二九	−				一一、一〇、二七	二七	卅
9	[redacted]	男	36	肺、三期、中熱	一一、四、一三	±						
					一一、七、二二	±	一一、七、二五	〇・一五	ナシ	一一、九、一	三七	卅
10	[redacted]	男	33	肺一期陳舊肋膜炎、貧血	一一、一、三一	+						
					一一、二、四	+	一一、二、四	〇・〇八	ナシ	一一、三、二四	四八	卅
11	[redacted]	男	7	氣管枝腺腫	一一、六、三	−	一一、六、一四	〇・〇五	ナシ	一一、七、四	二〇	+
					一一、六、一〇	−				一一、七、二五	四一	卅

少シク其説明ヲ試ムルナラバ、

第一號患者、十三歳ノ女兒、肺結核第二期ノ初メ、輕熱アリ、大正一〇年八月、九月及ビ十一月皆ナ陰性、十一月二十二日『AO』〇・〇五瓩接種、後ニ小硬結ヲ生ズ、同年十二月二十日、即チ接種後二八日後ピ反應中等陽性、十一年四月十四日、即チ接種後一七四日ヲ經テ強陽性デアル。此例ヲ以テスレバ、『AO』接種ニ由ルピ反應發現ハ二八日以内ニ中陽性トナリ、漸次強クナリ、一七四日ノ後ニモ其強度ヲ保ツモノト謂ヘル。此例ニ在テ又タ殊ニ面白キコトハ、『AO』接種ノ前ニ約二ケ月間ニ亙リテ「ツベルクリーン」療法ヲ施サレタノデアッタガ十五回ヲ重ネテ前後ニ檢査サレテ皆陰性

デアツタモノガ、唯一回『AO』ヲ接種サレタルコトニヨツテ、斯クモ鮮カニ强イ反應ヲ現ハスニ至ツタコトデアル。又タ此子供ノ初メヨリ現ハシタル輕熱ハ其中何日トモナシニ消失シテ終ツタ。

第二號患者、十五歳ノ男、肺結核第二期ノ中、同ジク輕熱絶エズ、大正十年八月、九月倶ニ陰性、十月十一日『AO』〇・〇五瓩接種、局所全身反應ナシ、十月二十五日、即チ接種後二週間、陰性。十一月一日、接種後三週間ニシテ弱陽性。四週間ニシテ中陽性。接種部ニハ硬結ヲ生セズ、體重ヲモ特ニ增加セズ、肺病狀ニモ特ニ改善ノ痕ナシ、後チ、治療ヲ中止スルノ事情アリ、十一年五月五日再診、貧血甚ダシク、肺ノ病變擴大、弛張熱、ピ反應弱陽性、即チ第一回ノ接種ニヨリテ一旦增强セルモノガ、半年ノ後病勢進行ト倶ニ減弱セルモノデアル。五月九日、體重三一瓩。家人ノ言ニ據ルニ第一回接種後冬季間稍〻著シク增加セル體重ガ近來頓ニ減少ニ傾ケルモノデアル。『AO』〇・一瓩接種。六月二日、即チ第二回接種後滿四週ニシテピ反應最强陽性、病勢頓ニ懈リ、熱去リ、體重增加ニ向ヒ、七月十八日、三四・五瓩。九月十日ピ反應最强陽性、十一月七日體重三八・〇瓩、十二月二十九日四〇・〇瓩。

第三號患者、十八歳ノ男、肺結核第二期、陳舊肋膜炎、輕熱、十年十月十四日ピ强陽性、十一年一月肋膜炎再發、高中熱持續一ヶ月以上、二月二十四日、ピ弱陽性、三月七日殆ンド陰性。三月八日『AO』〇・一瓩。後、局所ニ小硬結ヲ生ズ、四月七日、接種後三一日、中等陽性。

第四號患者、十五歳ノ男、肺結核第二期ノ初メ、頸腺腫、强キ貧血。十年五月二十日陰性、同月二十四日、〇・一瓩接種、同二十七日陰性。七月八日、接種後四五日ニシテ最强陽性。十二月二十七日第二接種、十一年二月二十八日、最强陽性。第二回接種後滿三ヶ月就業健人ノ如シ。

第五號、第六號患者ハ第四號ノ血族、共ニピ反應弱陽性、『AO』接種後、五號ハ五十三日ニシテ檢査セラレ最强陽性、六號ハ二六日後ニシテ既ニ强陽性。

第七號、初メ弱陽性、『AO』接種後三十八日ニシテ檢査セラレ强陽性。

第八號、初メ陰性、接種後十三日弱反應、二十七日ニシテ强陽性。

第九號患者、三六歳ノ男、進行性肺結核第三期、弛張性中熱、十一年四月、七月共ニ殆ンド陰性、『AO』〇・一五瓩接種、反應ナシ、三十七日ヲ隔テ、強陽性。

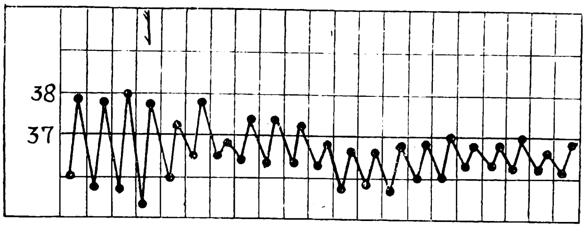
第十號患者、初メ弱陽性、少量ノ『AO』接種、四十八日後ニハ強陽性。

第十一號患者、氣管枝腺腫、十一年六月中二回共ニ陰性、少量ノ『AO』接種後二十日ニシテ弱陽性、四十一日ニシテ最強陽性。

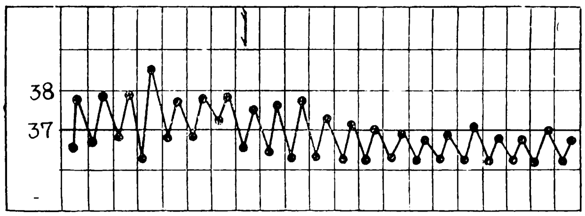
此ピルケー反應ヲ檢査スルコトニヨッテ我々ノ學ビ得ルコトノ中、殊ニ著シイ事象ガ二ツアル。其一ハ人間ガ既ニ明カニ結核性疾患ニ罹ッテ居リ、然カモ未ダ起ツベカラザル末期ト云フデモ無キ病例ニ於テ、殊ニ腺病性ノ子供ニ在ッテハ、可ナリニ屢〻ピ反應陰性ノ者ガアルコトデアル。上記ノ十一例ノ中デ、第一、二、四、八及ビ十一號ハ皆ナ初メ陰性デアッタ。而シテ此十一人ハ皆外來患者デアルカラ、非常ナ重症デハナイコトハ言フマデモ無イ。而シテ是等ノ陰性反應ハ夫レ故ニ所謂陰性「アネルギー」デモ無ケレバ、「ツベルクリーン」等ニ因ッテ慣致セラレタル所謂陽性「アネルギー」デモ亦タ無イ。先ヅ特別ナル一種ノ「アネルギー」デアル。卽チ知ル、ピルケー反應ハ結核性疾患ノ確徵トシテハ常ニ必ズシモ信頼スベカラザルモノデアルコトヲ。又タ病勢ガ增惡ニ傾ク場合ニハ此反應ガ減弱セラルヽコトハ既ニ周知ノコトデアルガ、第二號患者ニ於テモ明カニ此關係ヲ現ハシテ居ルヲ見ルノデアル。其二ハ卽チ我々ノ『AO』ニ由ッテ此陰性又ハ弱反應ガ增強シ又ハ發現スルニ至ルコトデアルガ、之ハ此項ノ主題デアルカラシテ更ニ贅說スルヲ要シナイトシテ、之ニ附加シタキコトハ、此『AO』ニヨリテ增強シ又ハ發現シタルピ反應ガ其後可ナリ永ク保續サルヽコトデアル。第一號患者ニ於テハ唯一回ノ接種ニヨリテ陰性反應ガ四週許ノ間ニ中陽性トナリ、其後殆ンド半歳ヲ經タル後ニ至リテモ最強陽性ヲ保持シ得タルコトヲ見ルノデアル。其他第二號及ビ第四號ニ於テモ漸次ニ增強シ、數月ニ至リテモ其強度ヲ保續シタコトヲ知ルコトガ出來ル。其後ハ敢テ之ヲ檢査シナイノデアルガ、惟フニ病狀ノ逆轉シナイ限リ、事ニヨレバ殆ンド生涯ヲ通ジテ之ヲ保續スルヲ得ルモノデアロウ。普通ノ所謂健康人ガ、何レノ年齡ノ人ヲ檢シテモ殆ンド皆ナ陽性デアルコトニ據ッテ此推定ヲナスモノデアル。

其外茲ニ擧ゲタ事實ノ中デ、「ビ」陰性ノ場合ニ之ヲ「ツベルクリーン」(此「ツベルクリーン」ハ舊「ツベルクリーン」一分。新「ツ」TO三分、最新「ツ」菌乳劑六分ノ比ニテ作リタル所謂混合「ツベルクリーン」ナルモノデアル)ヲ注射シテ、反復十二回、若クハ十五回、二ケ月餘ヲ費ヤシテ尚ホ且ツビ反應ハ陰性デアツタ(第一及ビ第二號患者)コトデアル。此事實ハ嘗テ我等ガ專ラ「ツベルクリーン」ニ據ツテ結核ノ抵抗療法ヲ試ミタリケル時代ニハ無數ニ經驗シタルコトデアリ、世界ノ實地家ノ亦皆ナ經驗シタル所謂「ツベルクリーン」耐性デアリ、又所謂積極「アネルギー」ナルモノデハアルガ、此ノ記述ノ場合デハ特ニ之ガ「ツベルクリーン」作用ト、我々ノ『AO』ノ作用トノ劃然タル區別點トシテ睹ルヲ得ルガ故ニ一層面白ク感ゼラル、事柄デアル。卽チ單ニ此一點ヲ以テシテモ「ツベルクリーン」類ト我々ノ『AO』――一般ニ言ヘバ生菌製劑――トハ既ニ原則的ニ異ツタ所ノモノデアル。

第二圖



第三圖



熱ノ消失

此事實ニ就テハ亦タ後ニ記述スル各個ノ症例デ御覽ヲ願フ所デアルガ、其就中著明ナリケル者ノ中カラ二名ヲ選ンデ圖表トシテ揭ゲルコト、スル(第二、第三圖)。

第二圖ノ患者ハ右上葉ノ滲出性癆デ、十八歲ノ男子デアルガ、數月來圖表ノ初メニ示スガ如キ弛張性ノ中熱ヲ有ツテ居リ、病勢モ進行性ノモノデアル。十年八月二十三日ニ『AO』ヲ〇・一瓩接種シタガ其後ノ熱ノ經過ハ圖表ノ通リニ其後六日許リニシテ全然平熱ニ降ツタ。此患者ハ入院患者デアルガ、其後二回接種ヲ受ケテ其年十一月十三日ニ全治癈療シタ。

第三圖ノ患者ハ二九歲ノ男、入院、打聽診デモ、「レ」線診査ニテモ右

肺尖ニ空洞ヲ證明シ、右上中葉ニ滲出性硬性癆ヲ有スル、所謂第三期ノ肺患デアツテ、數ケ月間ノ入院觀察デハ餘リ甚ダシキ進行ハセヌモノデハアツタガ、熱ハ圖表ノ初メノ如キモノデ、素ヨリ普通ノ解熱劑デハ解ケ去ラナイモノデアツタ。十年九月十六日第一回目ニ『AO』ヲ〇・一瓩接種シタガ、圖ノ如キ經過ヲ示シテ解熱シ、其後發熱セズ、更ニ四回ノ接種ヲ受ケ、非常ノ輕快ノ裡ニ事故ヲ以テ廢療シタ。

是レヨリ以下

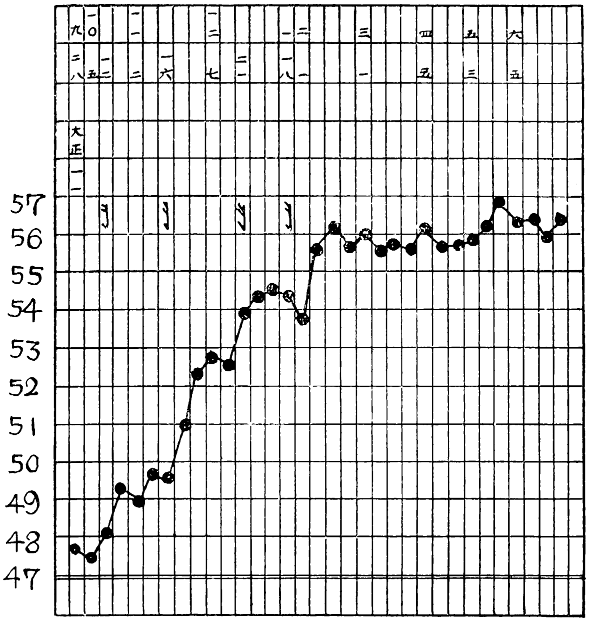
體重增加

ヲ主トシテ觀タル症例ヲ記述シ、之ニ圖表ヲ添ヘテ御覽ヲ願フコト、スル。此體重增加ハ、周知ノ如ク、結核患者ニ取リテハ最モ喜バシキ現象デアツテ、熱ノ消失ト倶ニ患者ノ最モ愉悅ヲ感ズル所デアル。我々ノ刀根山療養所デハ三、四年前迄ハ極メテ偶然ニ、例之バ肺患ハ重クナクシテ、他ノ合併症ノ爲メニ衰弱著シカリケル者ガ、其合併症ノ治癒ニ連レテ、急ニ著シキ體重增加ヲ示シタルガ如キ場合アリトスレバ、其患者ト室ヲ同フスル者ハ以テ之ヲ他室ノ者ニ誇リトシテ喜ビ、他室ノ者ハ態ニ屢々其室ヲ訪問シテ之ヲ眺メテ以テ愉悅ヲ頒タル、ガ如クシタモノデアツタ。併シ三年來ハ體重增加ヲ悅ビトシ、若クハ之ヲ羨ヤムノ情ハ以前ト異ラヌトシ、態々他室ヲ訪レテ之ヲ眺メ暮ラスヤウノコトハ全ク無クナツタ。蓋シ以前ノ如ク珍トスルニ足リナクナツタカラデアル。

以下列記スルモノハ就中其優秀ナルモノ、一部デアル。又タ其中一二ハ體重增加ノ程度ノミデハ特ニ著シカラザルモ、其經過ノ模樣ガ特ニ我々ノ興味ヲ覺ユルガ故ニ之ヲ收錄スルニ至ツタモノモアル。

小　芳　二〇年、男、入院　既往症　大正十年六月來咳嗽、喀痰アリ、時ニ痰中ニ血液ヲ附著ス、盜汗、胸痛アルヲ以テ醫療ヲ受ケ居ルモ恢復ノ徵ナク、體重漸次減少スルヲ以テ需診。初診　大正十年九月二十八月、現症　右第二肋間以上輕濁音ニシテ、右ハ呼吸音粗糙呼氣延長シ、左呼吸音弱ク多數ノ小水泡音ヲ聽取ス。診斷、左上葉上半部硬結性滲出性癆、右肺尖硬結性癆、第二期　經過　初診後二週間對症的治療、「クロールカルチウム」注射療法ヲ施シ觀察スルニ症狀依

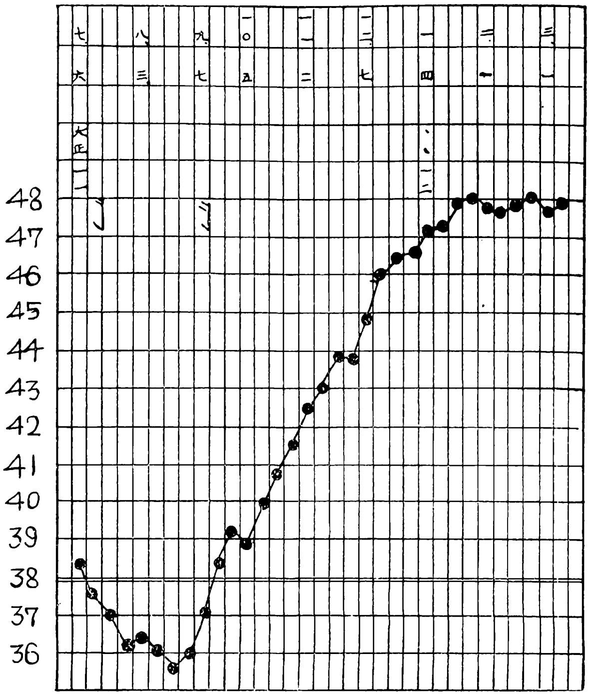
第四圖



然トシテ存シ體溫不規則ナリ、依テ『ＡＯ』注射療法ヲ開始。第一回注射大正十一年十月十二日、〇・〇五瓩、體重四八・〇瓩、反應ナシ。第二回注射十一月十六日、〇・一瓩、體重四九・六瓩、後ニ局所ニ小硬結ヲ形成ス。第三回注射十二月二十一日、〇・一瓩、體重五四・〇瓩、反應局處ニ小膿瘍ヲ形成ス。第四回注射十二年一月十八日、〇・二瓩、體重五四・三瓩、反應局所ニ小膿瘍ヲ形成ス。特療後ノ經過第一回注射ニヨリ體溫ハ直チニ常溫ニ下降ス、體重ハ第二回注射後急ニ增加スルニ至ル、第一回注射後血痰ヲ喀出シタルコトナシ、第三回、第四回注射ニヨリ體重益〻增加シ、運動スルモ發熱其他ノ障碍ナキニ至ル。轉歸大正十二年六月三十一日治癒廢療(第四圖添之)。

[redacted]　一七年、女、入院　既往症　大正十年十月感冒ニ罹リ引續、濕性右肋膜炎ヲ發シ翌年四月腹膜炎ヲ患ヒタリ。初診　大正十一年七月六月　現症　右第三肋間ニ至ルマデ輕濁音ニシテ、呼吸音弱ク多數ノ水泡音ヲ聽キ、其以下呼吸音甚ダ弱ク且ツ不純ナリ、左ハ第二肋間ニ至ルマデ打音短調小數ノ水泡音アリ、其以下呼吸音斷續性ナリ、咳嗽、喀痰僅微、體溫ハ三十七度二三分ニ達スル不正弛張型ナリ、腹部ハ一般ニ膨滿シ下腹部ハ限界不明ノ稍〻廣キ抵抗ト壓痛アリ、體重三八・三瓩。診斷　右上葉竝ニ左肺尖硬結性滲出性癆、兩肋膜肥厚、結核性産出性腹膜炎、第二期C。經過　初診後二週間對症療法ヲ行ヒ經過ヲ觀察スルニ、熱型不正ニシテ體重漸次減少ス。特殊療法開始。第一回十年七月十七日〇・一瓩體重三七・〇瓩、反應接種後三日間體溫ハ午後ニ於テ三十七度二三分ニ達シタルモ、其後三十七度以下ニシテ概シテ規則正シクナレリ、局所ニハ小硬結ヲ形成セリ。第二回九月

第五圖



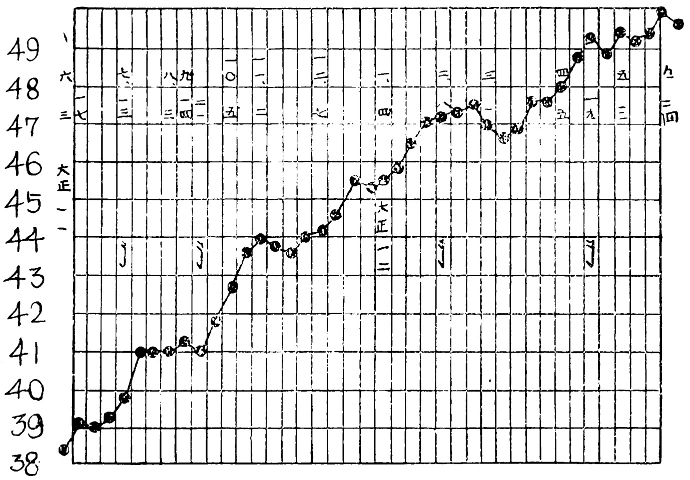
十三日〇・五瓩體重三九・九瓩、反應　注射第三日午後ニ體溫三十七度二分ニ上昇シタルモ翌日平溫ニ下降、爾來平溫整然、局所ニ小膿瘍形成。

特療開始後ノ經過　第一回注射後體溫ハ一時整然トナリシモ約四週ヲ經テ再ビ不正トナリ、且ツ稀ニ三十七度以上ニ上昇ス、第二回注射後熱型極メテ整然タリ、體重ハ第一回注射後約一ケ月間ハ增加ヲ見ザルモ減少セズ、一ケ月半ヲ經テ急ニ增加スルニ至リ漸次增加ス、體重增加ニ伴ヒ殊ニ第二回注射後ニ至リ、胸部水泡音漸次減少シ極メテ稀ニ聽取スルニ過ギズ、腹部膨滿モ減退シ壓痛全ク去リ、自覺的ニ苦痛ナク、働作ニ影響ナキニ至リタリ。轉歸　大正十二年三月二十三日治癒廢療(第五圖添之)。

[redacted]二三年、男、入院　既往症　生來健全、大正十一年二月來、咳嗽、喀痰、不正ノ發熱、胸痛、盜汗アリ、數ケ月來羞明流涙アリ、初診　同年六月十七日　現症　左右第三肋間以上輕濁音ヲ放チ、右胸ニハ多數ノ、左胸ニハ小數ノ濕性水泡音ヲ聽ク、咳嗽喀痰アリ、兩眼瞼結膜充血シ角膜表面粗糙溷濁、體溫ハ不正三十七度二三分ニ上昇ス、體重三八・二瓩。診斷　右上葉竝ニ中葉滲出性硬結性癆、左上葉硬結性滲出性癆、第三期B、角膜表層炎。經過　特殊療法開始マデ約一ケ月間對症的治療ノ下ニ觀察スルニ、胸部症狀ハ依然トシテ存シ、熱型不整、體重僅ニ一・〇瓩增加ス。特殊療法開始　第一回十一年七月十九日〇・一瓩體重三九・二瓩。反應　局所ニ小硬結形成スルノ外反應ト認ムベキナシ、第二回九月二十一日〇・一瓩體重四一・〇瓩、反應　局所ニ小硬結形成。第三回十二年二月八日〇・二瓩體重四八・三瓩、

反應　注射後三十七度二三分ノ發熱アリ三日間持續、局所ニ小膿瘍形成スルニ至ル、第四回四月十九日〇・五瓩體重五〇・三瓩、反應、局所ニ小膿瘍形成。特療開始後ノ經過　第一回注射ニヨリ體溫ハ平溫ニ經過スルニ至リ、體重ハ急ニ增加シ、約一ケ月ヲ經テ一一・〇瓩ノ增加ヲ見ルニ至ル、然ルニ第二回注射ニ至ルマデ約二ケ月間觀察スルニ體重ハ增加ノ傾向ヲ保ツモ、體溫ハ約三週後再ビ不正トナリ三十七度以上ニ上昇スルコトアリ、第二回注射後體重ハ再ビ盛ンニ增加ノ狀況ヲ示シ、體溫ハ二週後ニ平溫狀態トナル、第三回注射後、體重著シク增加シ、兩眼ノ刺戟症狀殆ンド全ク消散スルニ至リタルモ、胸部ノ理學的症狀著シキ輕快ヲ見ズ、咳嗽喀痰ハ減退ス、第四回注射後諸症益〻改善セラレタルモ胸部ノ水泡音消失セズ、目下尚ホ治療中（第六圖添之）。

第六圖



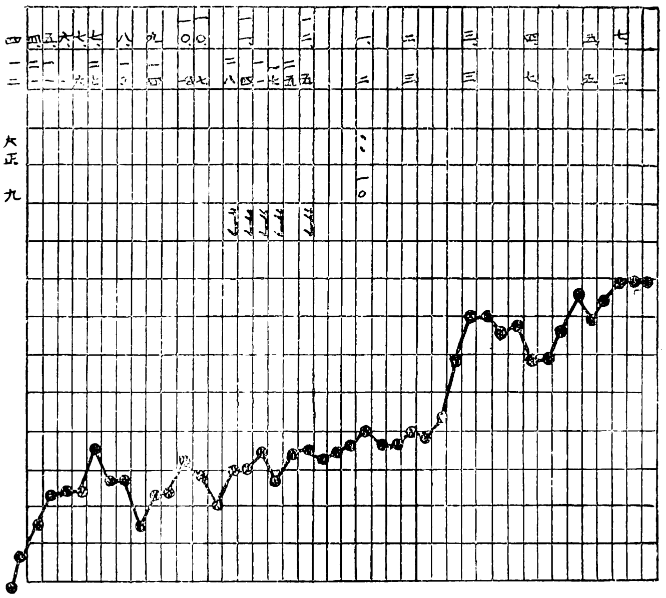
[redacted]　二三年、男、入院　既往症　生來著患ナシ、大正八年六月肺尖「カタル」ノ診斷ヲ受ケ治療、同年十二月流行性感冒ニ罹リ、爾來呼吸困難、咳嗽、喀痰、熱發アリ、次デ時々小量ノ喀血アルニ至レリ。

初診　大正九年四月十九日、現症　右胸ハ第三肋間ニ至ルマデ强濁音ヲ其以下ハ輕度ノ濁音ヲ放チ、左胸ハ打診上著變ナシ、聽診上右胸ハ第四肋間ニ至ルマデ前面後面共ニ氣管枝性肺泡音ニシテ多數ノ中竝ニ小水泡音ヲ聽ク、其以下著シク粗裂ナリ、左胸ハ呼吸音一般ニ粗糙ナリ、體溫ハ三十八度ニ達スル不正弛張型ナリ、痰中多數ノ結核菌ヲ證明ス、體重四八・五瓩。診斷、右肺上中葉硬結性滲出性癆、右胸肋膜肥厚、第二期C。經過、特殊療法開始ニ至ルマデ約七ケ月間ノ經過ヲ觀察スルニ體溫ハ漸次下降セルモ尚ホ時々不正ノ發熱アリ、咳嗽、喀痰減少セズ。特殊療法開始　第一回九年十一

月一日〇・〇一瓩體重四九・〇瓩、反應ナシ。第二回十一月九日〇・〇五瓩體重四九・〇瓩、反應ナシ。第三回十一月十六日〇・一瓩體重四〇・〇瓩、反應ナシ。第四回十一月二十四日〇・五瓩體重四八・五瓩、反應　接種翌日午後體溫三十七度五分ニ上昇直チニ下降ス、局所ニ小硬結ヲ形成スルニ至ル。第五回十二月七日一・〇瓩體重五〇・四瓩、反應、接種翌日午後體溫三十八度七分ニ上昇シ、三日間不正ノ發熱ヲ呈セシモ後ハ全ク平溫ニ復ス、局所ニ小膿瘍ヲ形成スルニ至ル。

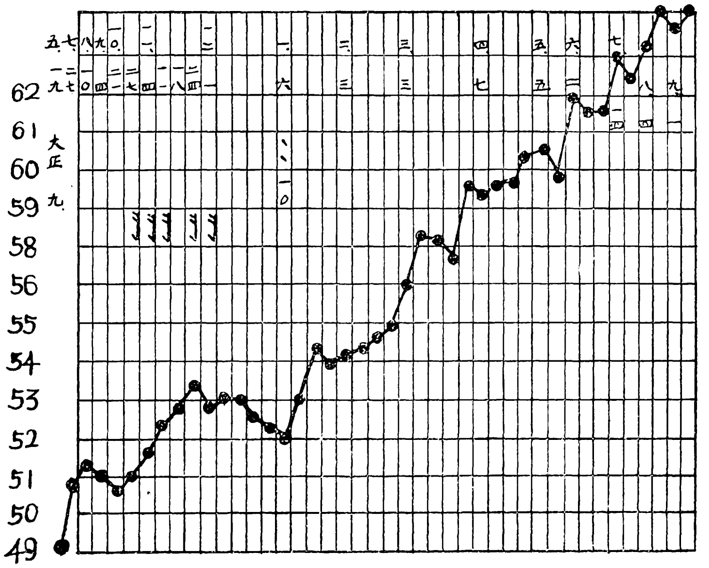
特療開始後ノ經過　體溫ハ特療開始後第三回後ニ著シク整然トナリ、咳嗽喀痰減退シ、自覺的著シキ輕快ヲ感ジ、體重ハ特療開始後ヨリ漸次增加シ、最終注射後三ケ月ヲ經テ體重五四・〇瓩ニ達シ、初診時四八・五瓩ニ對シ五・五瓩ノ增加ヲ示シ、咳嗽喀痰殆ンド消失、輕度ノ働作ニ對シ全ク影響ナキニ至レリ。轉歸　大正十年七月三日治癒退院(第七圖添之)。

第七圖



[redacted] 四〇年、男、入院　既往症　十九歲ノ時僂麻質斯ニ罹リ、大正九年五月頃ヨリ左胸痛、咳嗽喀痰アリ。初診、大正九年五月十五日　現症、左右鎖骨上窩輕濁音ヲ呈シ、呼氣延長、吸氣粗糲時々水泡音ヲ聽ク、左胸第四肋間以下强キ濁音ニシテ呼吸音弱ク多數ノ細小水泡音ヲ聽キ、聲動ハ亢進ス、體重四九・〇瓩。診斷、左右肺尖「カタル」、左肺下葉中度肋膜肺炎型癆、第二期C。經過、特殊療法開始ニ至ルマデ約六ケ月間、對症療法、「クロールカルチウム」療法ヲ行ヒ、其經過ヲ觀察スルニ增惡ノ徵ナキモ全身倦怠不快ノ感アリ。特殊療法開始第一回九年十一月一日〇・〇一瓩體重五〇・〇瓩、反應ナシ。第二回十一月九日〇・〇五瓩體重五〇・五

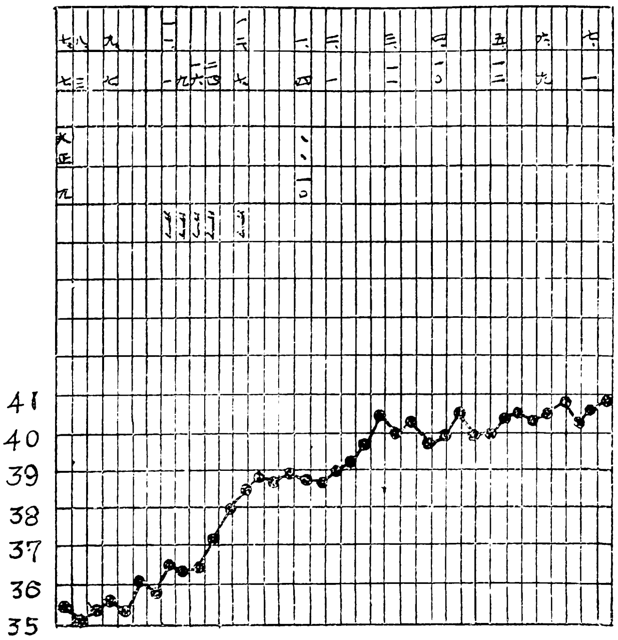
第八圖



瓩、反應ナシ。第三回十一月十六日〇・一瓩體重五一・三瓩、反應ナシ、後ニ刺戟ニヨリテ硬結膿瘍ヲ形成、第四回十一月二十四日〇・五瓩體重五二・三瓩、反應　局所ニ約二週ヲ經テ中度ノ膿瘍ヲ形成ス、第五回十二月七日一・〇瓩體重五二・〇瓩、反應接種翌日午後體溫三十八度六分ニ上昇シタルモ直チニ平溫ニ下降ス、局所ニハ後日ニ至リ稍大ナル膿瘍ヲ形成シ該膿瘍ヲ切開セルニ淡黃褐色ノ僅ニ溷濁セル液多量ニ排泄ス。特療開始後ノ經過　第三回接種後體重ハ一旦急ニ增加ノ徵ヲ呈シタルガ、接種部膿瘍ノ炎性刺戟殊ニ稍ヤ劇シキニ會シテ少シク減少シ、切開排膿後再ビ漸次增加シ十年三月三十一日初診時ノ體重四九・五瓩ニ對シ實ニ五七・八瓩ニ達スルニ至ル、特療開始後一般ノ自覺症著シク消散シ、肺尖部ノ水泡音全ク聽カズ、左胸下部ノ水泡音亦殆ンド消散スルニ至レリ、輕度ノ作業ヲ試ミルモ何等ノ影響ナク、體重ハ益〻增加ノ傾向アリ、轉歸　大正十年九月十六日治癒撥療。其後理髮業ニ從事スルモ全ク障碍ナク、體重ハ實ニ六四・五瓩ニ達セリト云フ(第八圖添之)。

[redacted]五二年、男、入院　既往症　生來虛弱、十二歲ノ時腸「チフス」ニ罹リ、大正二年ノ春肺炎ヲ患ヒ、爾來咳嗽、喀痰、盜汗、胸內苦悶ノ症アリ、初診、大年九年七月七日、現症、顏面貧血、舌苔ヲ衣シ、咽頭後壁顆粒性炎アリ、左右第二肋間ニ至ルマデ輕濁音ヲ放チ、右ハ呼吸音弱ク呼氣延長シ、左ハ呼吸音弱ク多數ノ濕性水泡音ヲ觀ク、咳嗽、喀痰中度、痰中結核菌ヲ證明ス、體溫往〻三十八度ニ達スル三十七度五分內外ノ不正熱型、體重三五・六瓩、診斷、左上

第九圖



葉上半部滲出性硬結性癆、右肺尖硬結性癆、第二期C。經過、特殊療法開始ニ至ルマデ四ヶ月間對應療法ヲ施シ觀察スルニ、體溫ハ下降セルモ尚ホ不規則ナリ、咳嗽、喀痰尚ホ多シ。特殊療法開始　第一囘九年十一月一日〇・〇一瓩體重三六・五瓩、反應ナシ。第二囘十一月九日〇・〇五瓩體重三六・四瓩、反應ナシ。第三囘十一月十六日〇・一瓩體重三六・四瓩、反應ナシ。第四囘十一月二十四日〇・五瓩體重三七・二瓩、反應、局所ニ小硬結ヲ形成ス。第五囘十二月七日一・〇瓩體重三八・四瓩、反應、接種後第三日目午後體溫三十八度ニ上昇シタルモ直ニ下降ス、局所ニ小膿瘍ヲ形成スルニ至ル　特療開始後ノ經過　第三囘接種後、咳嗽喀痰著シク減ジ、體重增加ノ傾向ヲ示シ、熱ハ整然トナルニ至リ、注射ノ囘ヲ重ヌルト共ニ諸狀態益〻良好、輕度ノ運動ニ全ク障碍ナキニ至ル。轉歸、大正十年七月七日治癒廢療（第九圖添之）。